

大正・昭和・平成 3時代の記憶(上)

北海道建設新聞 令和5年4月18日付 9面



暴れ川治める一大事業

大正・昭和・平成 3時代の記憶(上)

十勝川の治水事業がことし、開始から100年を迎える。幾多の自然災害から立ち上がり、学び、先人が苦労して作り上げた川は、今や日本の食料基地と呼ばれる十勝を育てた。経済だけでなく文化や観光、あらゆる面で人々に豊かな恵みをもたらす。その歩みを大正・昭和・平成の3時代ごとに振り返る。

(帯広支社・太田 優駿記者)

明治から民間の手で開拓を進めてきた十勝川流域。物資輸送にその流れを利用し、沿岸では川港が栄えた。一方、細く蛇行

した川は「暴れ川」と呼ばれ、大雨の度に氾濫し、沿岸一帯が沼と化した。

特に1898年には7日連続の豪雨で本流・中小河川が全て氾濫。2000戸が被災し、6000人の畑が流出した。この洪水を受け1918年に十勝川治水計画大綱を作成。22年には台風による大雨で橋梁損壊323カ所、堤防決壊36カ所という既往最大の水害が発生し、茂岩の計画流量を毎秒4170立方尺から9740立方尺に改めた。

23年に帯広市大通南1に道庁が十勝川治水事務所を構え、本格的な治水事業が始まった。最優先したのは開拓の中心だった帯広市西帯広から豊頃町茂岩までの56キロ。築堤や護岸、新水路掘削は9カ年で総額601万円、現在の価値で約156億円の大規模事業だった。

第一の工事は利別川が流れる池田町市街地裏と鉄道橋上流の

池田町堤防新築から全ては始まった



初期は人馬の力で土を運んだ(帯広開建提供)

堤防新築。用地買収や関連する鉄道橋の拡張を経て26年4月に着工した。池田町市街地は利別川に近いため浸水が多発していた。役場の裏庭に救難用の船を格納していたほどだった。

当時は土取場から人力で1合(0・6立方尺)積みの土運車に土を積み、馬が引くトロッコで運んだ。馬1頭につき4、5台の土運車を引かせ、1年で8万1168立方尺の土を盛った。

大正末期の大卒サラリーマンが月給50円、米1升50銭の時代に、労働者の賃金は午前6時から午後5時まで働いて一日1円50銭、雑役を担う女性はその半額。土運車を引く馬を持つ人は5円という条件だった。

その後、ベルトコンベヤーに複数のバケットを付けたエキスカベーターを導入した。線路上を移動しながら水路の掘削を進め、土運車は5合(3立方尺)30両を引くことができる蒸気機関車が活躍することで作業効率は上昇。馬と機関車は60年代初頭まで活躍し、十勝川の治水に大きく貢献した。



大正・昭和・平成 3時代の記憶(中)

北海道建設新聞 令和5年4月19日付 9面



道内屈指の人工河川へ

大正・昭和・平成 3時代の記憶(中)

で沼を新水路の一部に使い排水するルートに変更して、原野の開発促進を見込んだ。

「十勝川さえなければ」という流域住民の本音が生んだ壮大な人工河川づくり。断面が狭く、何度も蛇行する十勝川下流部は洪水が頻発し、その度に人や家畜の命だけでなく、丹精込めて作り上げた農地が失われた。住民は本流を原野だった統内に切り替えられないかと行政に陳情。熱意が通じ、直線状の15.2km、低水路幅160-180mに及ぶ道内屈指の人工河川づくりが始まった。

統内新水路は当初、利別川と十勝川を池田町川合付近で合流する計画だった。しかし、鉄道線路のかさ上げによる工事費増加や使える農地をつぶす問題があった。一方、約1000mある統内原野は泥炭地で、中央にある沼には悪水が滞留して、開発の障害となっていた。そこで

統内新水路と上流の利別川を結ぶ川合新水路に着工した。太平洋戦争の影響で7年間の中断を経て56年に完成。19年に及ぶ事業となった。58年には締め切り堤の整備を終え、開拓から度重なる水害が起きた川は「旧十勝川」と名を改めた。その後管内各地で蛇行した

「本流切替で氾濫減を」新水路づくり

統内新水路の完成前後図



河道の切り替えや築堤、護岸工事が進み、昭和50年代までに現在の河道が形成された。このほか浦幌十勝川で発生した河口閉塞(へいそく)を解消する浦幌十勝導水路が82年に、流量調節・水力発電を目的とした十勝ダムが84年にそれぞれ完成した。木野引き堤事業につながる。

治水事業の効果もあり、氾濫の規模は縮小していった。しかし、81年のいわゆる「56水害」により、各地で氾濫や河岸浸食の被害が発生。帯広市と音更町を結ぶ旧十勝大橋では、桁下1mまで水位が上昇し、市街地が浸水する恐れもあった。この出来事は、後に2016年台風災害で帯広市の水害防止に貢献した。

大正・昭和・平成 3時代の記憶(下)

北海道建設新聞 令和5年4月20日付 9面



終わりになき減・防災対策

大正・昭和・平成 3時代の記憶(下)

2016年夏、十勝を襲った連続台風は各地で河川の氾濫を招き、56水害を上回る道内過去最大の被害となった。一方、帯

流量は毎秒3100立方メートルから6100立方メートルに増えた。広くなった河川敷はパークゴルフ場や公園として利用され、夏には管内外から10万人規模の観客が集まる花火大会の会場となるなど、多くの人に親しまれている。

広市や音更町の市街地が広がる中流部は1998年に完成した木野引き堤が機能。これがなければ一帯が浸水し、被害が拡大した恐れがあった。

並行して進めた十勝大橋架け換えは96年に完了。橋長は132メートル長501メートルとなり、十勝を象徴する斜張橋に生まれ変わった。

十勝大橋周辺は川幅が上下流より狭く、河道が大きく曲がり洪水の危険性が高かった。そこで音更町側の堤防を1300メートル退する方法を決断。用地となる130世帯の住民が移転し、88年に着工した。

堤防1700メートルを動かし、帯広市側に寄った河道流心を中央に来るよう流路を直線化した。

このほか、治水やかんがい用水、水力発電を目的とした札内川ダムが98年に完成。07年には千代田堰堤の洪水対策で千代田新水路ができ、国内最大級となる高さ3・91メートル、幅43・3メートル起伏式ゲートを構えた。左岸側の1門は実験水路とし、近年は16年の台風災害時に破壊した空知川の湾曲外岸部を再現して、

大水害から市街地守った木野引き堤



穏やかに流れる十勝川と十勝大橋

メカニズムの検証を進めている。

帯広市の治水の森公園には十勝川治水70年記念碑がある。そこに十勝川治水事務所長として各事業の執行に貢献した斎藤静脩氏の言葉がある。

「文化の進展は自然の征服にあらずして自然の利用にある。(中略)河川改修の設計なす者、都市計画に当たる者、水防に任ずる者、常に自然の姿を探究その意図を明らかにし、歴史を重んじ、在来河川に就き十分なる研究を遂げ自然現象に逆行せぬことを忘れるなかれ」

令和の時代となり、全国各地で水害が多発している今、この言葉の重さを実感する。

減災・防災に終わりは無い。繰り返される未曾有の災害を経験し、時に大胆な発想で治水事業を進めた先人の苦勞が物語る。受発注者をはじめ多くの人がある歴史を知ることが、次の世代により豊かな川を残すための重要な礎となる。